

発行日：平成24年3月15日（毎月1回WEB発行）

東日本大震災から1年が過ぎました。皆様からは変わらぬご支援やご声援をいただきありがとうございます。今の福島の暮らしをご覧ください。なお、本紙の英語訳版・中国語訳版・韓国語訳版・ポルトガル語訳版・タガログ語訳版・フランス語訳版は、当協会HPからダウンロードできます。

【(財)自治体国際化協会助成事業】

福島の風物



桑折宿雛めぐり
(桑折町 2012.2.17撮影)

桑折町では、街中を歩いて楽しめる地域づくりとして「桑折宿雛めぐり」が開かれています。各店先には雛人形、吊し雛やさるぼぼが展示され、週末になると多くの人々が訪れています。



梨畑の除染
(伊達市 2012.2.24撮影)

昨年は放射線の影響で栽培出荷ができない果樹農家がたくさんありました。今年は安全な果樹が栽培できるようにと、行政と農家が一体となって幹皮を剥ぐ除染作業を急ピッチで進めています。



中国のテレビ取材団
(福島市 2012.2.25撮影)

震災1年後の様子を取材するため、中国のテレビ局が福島にやってきました。当協会の他、復興活動に関わっている外国出身者の団体や留学生などを取材していきました。

福島からの声

石田美由紀さん (田村市 女性)

前々から出席を予定していた法事が実家の滋賀であることもあり、3月16日に子ども3人を連れて実家に帰りました。そして子どもの学校が始まる時期に合わせて4月1日に田村に戻ってきました。この学校が始まるということは、生活のパターンを元に戻すいい機会となりました。震災から1年になり生活は普通に帰っているように見えます。でも、この震災で収入は激減し、一応の生活はしているものの文化的なことまでは気が回らない、津波で多くを失った人たちのことを考えると大変だったとは言えない、がんばらなくちゃ、こういった心の余裕のなさがそのうちどこかで爆発するのではと危惧しています。

三上博史さん (須賀川市 男性)

妻の第一子の妊娠が分かった10日後に震災が起こりました。妻の実家が北九州市なので妻だけの避難も考えましたが、お互い冷静に考え、一緒にいるほうが精神的に安定するというのでずっとここにいました。もちろん妊婦への内部被ばくの心配があるので、妻が口にする水や食べ物には気を遣いました。8月には実家に帰り、10月25日に無事男の子が生まれました。母子ともに健康で11月には戻ってきました。母乳で育てているので、もちろん子どもの内部被ばくについては気を付けていますが、放射線の感受性もストレスで高まると聞いています。あまり神経質にならないように普段通りの生活をするように努めています。

真歩仁しょうんさん (福島市 カナダ出身男性)

原発事故に関しては、妻と何をすべきか長い時間をかけて真剣に考え、結局庭や建物の除染が終わるまでは子どもだけ南会津の祖父母のところに預けることにしました。放射線レベルや家の除染などまだまだ頭が痛いことばかりです。それにしても事故のあった原発の名前が「福島」だったことはとても残念です。世界中の人々がこの惨事に福島県全体が巻き込まれたと思ってしまいました。私たちは友だちや家族が暮らす福島が大好き、家も仕事も大事、そしてここに住みたいです。私たちは、食べ物の放射能測定の改善や徹底した除染作業といった取り組みに希望を見出し、そしてそれが政権によって変わらない事を望んでいます。

三瓶純恵さん (浪江町 中国出身)

3月12日の夜中、町役場から津島方面に避難するようにと無線が流れました。その時は2~3日で帰れるだろうと思っていましたから、その朝早くとりあえず身の回りのものを持って家族全員で避難しました。その後避難所を転々として8月から福島市内の仮設住宅に住んでいます。小学生の子どもが2人いますが、心の準備がないまま、突然の避難、慣れない避難所や仮設住宅での生活、新しい学校と子どもなりにストレスは感じているようです。浪江には5年前に新築したばかりの家があり、ローンも残っています。いろいろ考えてもしょうがない、なるようにしかならないと思っています。